

夢野久作『少女地獄』論

——語りの構造から見えるそれぞれの「地獄」——

岩 沢 一 輝

一 はじめに

夢野久作の『少女地獄』は一九三六年に黒白書房より刊行された。そこに収録された『何でも無い』『殺人リレー』『火星の女』と題がつけられた三つの連作だが、そこに作品同士の直接的な関係は見えず、それぞれが独立した作品として存在している。このうち『殺人リレー』だけは一九三四年一〇月に『新青年』の誌上で発表されており、他二つの作品は『少女地獄』として刊行される際の書き下ろし作品である。

前提として『少女地獄』に所収されている作品（以下テキスト）は、すべて書簡体形式をとっていることを確認しておく。まず『何でも無い』は、書簡の書き手である臼杵利平が白鷹秀麿に宛てたものがテキストとなっている。『殺人リレー』は「第一の手紙」から「第六の手紙」と記された書簡が時系列に従って配置されたテキストである。『火星の女』は新聞記事と書簡の二つから成立するテキストである。

久作は作品の多くで書簡体形式を用いており、本作を読み解く際にも書簡の持つ効果を念頭に置く必要がある。すなわち、書簡の書き手によって物語が語り直されたものが、テキストとして成立しているということである。よって我々読者は常に語り手によって構成された物語の解釈者に過ぎず、実際の出来事を知ることとはできない。書簡に書かれているからと言ってそれが真実である保証はどこにもないのだ。

これまでの先行研究においては、書簡体形式であると同時に『遺書』としての性格を有していることが言及されている。具体的には『何でも無い』の姫草ユリ子の遺書、『殺人リレー』の友成トミ子の遺書、『火星の女』の甘川歌枝の遺書である。伊藤里和はこれらに触れた上で『少女地獄』が死を描くことを主軸にした作品ではないことを述べ、『遺書』によってもたらされる作中人物の生死が曖昧であることに着目し、〈仮死〉という表現を用いながらそれぞれの「遺書」からもたらされる〈仮死〉が持つ意味を検証している¹⁾。この生死の曖昧さに関しては中川綾乃も触れ

ており、女性たちは「生きているか死んでいるか定かではない」状態にあり、真実と嘘の狭間をさまよい続けているとする。また、それぞれのテキストから「嘘」「愛」「憎悪」を取り出し、これら三つの本質を人間から切り離すことのできないものとしたうえで、曖昧な中にあるからこそ相対的にこれらの本質が輪郭を持つのではないかと結論づけている。² これらの考え方は「書簡」「遺書」として「少女地獄」をとらえる上で重要な観点となりえる。

また別の観点として、申河慶は『少女地獄』が久作の代表作である『ドグラマグラ』の評価の延長に置かれることで既存の久作文学の評価の枠に還元されてしまっていると述べたうえで、「遺書」「書簡」「新聞記事」といったものを形式上の諸特徴としてあえてとらえず、そこにイデオロギー性を見出そうとした。³

以上のように『少女地獄』に関して論じられている観点は複数あるが、三つのテキスト単体、それらの集合である『少女地獄』全体という差はあれ、それらテキストの構造を分析することで、物語内容を超える読解を行おうとしている点が、近年の研究の特徴である。たしかに作中で少女たちが遺す「遺書」には重要な意味がある。しかしそれと同じくらいに、その「遺書」がテキストの中で語り手によって配置されることに意味があるのではないだろうか。

本稿では、作品の書簡体形式、「遺書」の存在に着目した上で、それらが配列されている意図を探ることで、それぞれのテキストをとらえなおしてみたい。それと同時に、『少女地獄』とこれら

の作品が題されている以上、より大きな連関が物語言説の観点からもたらされるはずである。つまり一つのテキストとして『少女地獄』を扱い、それが語り手のレベルを踏まえて読者にどう認識されるのか、そしてその段階において『少女地獄』としてまとめられている作品の「地獄」とはなんであるのかを考察していくものである。

二 『何でも無い』の「地獄」

『何でも無い』は『少女地獄』の最初に配置されており、少女姫草ユリ子の「遺書」が届けられたことを契機に、白鷹秀磨へ宛てられた白杵利平の書簡の形式をとる。その書簡には、姫草ユリ子が自殺する旨を記した遺書とそれを白杵利平のもとに持ってきた曼荼羅という人物がいること、事件の発端として白杵の日記が付されており、姫草ユリ子には「嘘」をつき人を騙す才能があり、その「嘘」の説得性が発生する行動や魅力が綴られていた。そしてその「嘘」に翻弄されながら、白杵が「嘘」を暴くまでの過程が記されている。

この作品の題名である「何でも無い」はテキスト内たびたび使われる言葉である。本稿ではまずこの言葉の意味を考察したい。『何でも無い』を読む際に最初に考えておかねばならないのは、女性の自己像の確立という観点である。テキスト全体を通じて、姫草ユリ子はその嘘によって自らの自己像を獲得している。

何事も報いらぬこの世に……神も仏もない、血も涙もな

い、緑地オアシスも蜚気楼も求められない沙漠のような……カサカサに乾干びたこの巨大な空間に、自分の空想が生んだ虚構の事実を、唯一無上の天国と信じて、生命がけで抱き締めて来た彼女の心境を、小生等は繰り返し繰り返し憐れみ語り合っております。

「折角のお骨折りでしたがね。取り調べてみると赤の痕跡もありませんよ。……尤も郷里は裕福というお話でしたが、電話と電報と両方で問い合わせたところによりますと、実家は裕福どころか、赤貧洗うが如き状態だそうです。何でも直ぐの兄に当る二十七、八になる一人息子が、家土蔵をなくするほどの道楽をした揚句、東京で一旗上げると言って飛び出した切り、行方を晦くらましているそうで、年老とった両親は誰も構い手がないうまに、喰うや喰わずの状態でウロウロしているそうです。勿論あの女……何とか言いましたね……そうそうユリ子からも一文も来ないそうで、お話の奈良漬の一件や何かも彼女の虚構らしいのです。姫草ユリ子という名前も本名ではないので、両親の苗字は堀というのだそうです。慶応の病院へ入る時に自分の友人の妹の戸籍謄本を使って、年齢を誤魔化ごまかして入ったと言うのですがね。本当の名前はユミ子というのですが、その堀ユミ子が十九の年に、兄の跡を遂うて故郷を飛び出してからモウ六年になると言うのですから、今年十九という姫草の年齢も出鱈目でしょう。自分では二十三だと頑張っていましたかね。むろん女学

校なんか出ていないと言う報告ですから、ドコまでインチキだか底の知れない女ですよアレは……」(『少女地獄』 本文引用)

作中に登場するユリ子以外の女性たちは総じて何かしらの社会的立場を得ている。臼杵の妻然り、白鷹の妻然り姫草ユリ子の叔母(正確に言えば叔母ではないが)ですら、叔母という関係性によって、その存在を獲得していると言えよう。しかし姫草ユリ子はそうはない。彼女の得る立場はすべて「嘘」によって構築されており、「嘘」でないと認可されない自己像を有する存在が「姫草ユリ子」なのである。そこから次のような臼杵の存在も見えてくる。

姫草の存在を自分の支配権を破綻しかねない脅威として意識するがゆえに、姫草の「何でもない」嘘をつぶさに観察し、彼女の存在を否定しようとするわけである。／問題になるのは姫草の女性としての魅力が臼杵の個人や家庭のレベルを超えて社会のレベルにまで及んだとき、臼杵は男性としての支配権への脅威として姫草を追いつてしまったところにある¹⁾。

こう考えれば、何とか自己を獲得しようとする女性に対して、それを『何でも無い』ことにしたい、すでに医者という強固な立場を獲得した男の存在が見えてくる。姫草ユリ子の立場は、男性

であり医者である白杵によって確立されるが、白杵の言葉はそれが男性自身の立場を犯しうるところまで進んだ際に、男性が女性の立場を消し去るための言葉と考えることができる。

白杵医師は姫草ユリ子に関する出来事を、「何でも無い」事と繰り返し述べることで「安心」を得ようとしている。つまり一連の出来事を、日常とは切り離された別次元の事、すなわち「夢」として処理し、それを報告することによって、悪夢の終焉をもたらそうとしているのである。

『何でも無い』を論ずる際に考えなければならないのは題にも付されている「何でも無い」という言葉の意味である。先の引用に依れば、白杵の書簡によって姫草ユリ子が「夢」になることは、白杵が「何でも無い」できごととして彼女を葬ろうとしていると考えることができる。伊藤里和は、「遺書」の日付によって、それすらも「嘘」である可能性を考慮し、白杵は今もなお悪夢に居ると述べているが、ここで重要なのは、なぜその「夢」を白杵は気にしつづけるのか、なぜその夢から解放されたがるのかということだ。

ここであらためて白杵とは、どのような存在であるのか確認してみたい。後述する『殺人リレー』では白杵にあたる人物は設定されていない。語る女性に対し、それを相対化して語りなおす男性は存在しないのである。この差異をどのように考えるべきだろうか。

虚言症が発症するのは「月経前の二三日の間」であるから、「遺書」が書かれた時期も発作の起こりうる時期なのである。したがって、この「遺書」発作による「虚構」の可能性があり、彼女の「自殺」の真偽も疑わしい。

これをもとに考えれば、白杵の存在は、「姫草ユリ子の嘘」を相対化する役割を帯びているといえる。当然のことだが「嘘」とは基本的に、それらを相対化する「何か」によってはじめて「嘘」として認識される。本テキストを構成する「嘘」も、白杵によって相対化されることではじめて「嘘」として認識される。このようにユリ子の言説の相対化の装置として白杵は存在しているのだ。伊藤里和は最終的に、白杵が姫草ユリ子の死についてすら「嘘」の可能性を見出すことで、彼女の生と死が曖昧になると論じている。

ではなぜ、白杵は「何でも無い」という、言ってしまう「夢」を気にしつづける、同時にそこからの解放を願うのか。

まるで「夢」を見るように、白杵医師は姫草ユリ子の創作した「虚構」の世界に没入しているのだといえよう。

このように述べられる要因として、白杵自身にも「嘘」があるためにそこにとらわれているからではないか。姫草ユリ子は白杵によって相対化されることでその「嘘」が露呈するが、相対化というのはいかなれば、姫草ユリ子によって白杵の「嘘」もまた露

呈する可能性が十分にあるということだ。『何でも無い』全体が白杵の書簡形式である以上、そこに情報の取捨が介在するのは当然と考えていいだろう。つまりそこに語られていない出来事が存在するはずなのだ。より具体的には自分の知られてはいけない事実を、「姫草ユリ子の嘘」とすることで、都合の悪い事実を排斥したのではないだろうか。

「何でも無い」の天才的な嘘つき少女（姫草）について男性医師（白杵）の報告が言葉どおり受け入れられているだけで、そのためにその報告にかかわって重要な語り手の虚偽性について触れられていない。／「何でも無い」ことで嘘をつくのかという疑問に対する、そのような白杵医師の報告は、読者にはその報告の真偽性（語り手の信憑性）を疑わせる仕掛けがテキストのいたるところにちりばめられている⁸。

このように考えると、最終的に白杵が悪夢として、夢として「何でも無い」ことにしたかった理由にも説明がつくのだ。では、具体的にどのようなことが白杵側の隠したいこと、「嘘」になるのか。それを考えるきっかけになるのは白杵と田宮特高課長のやり取りである。

「イヤ。よく御腹藏なくお話下すった。それならばコチラからも御参考までにお話しますが、君は十月の……何日頃でしたか。午後になって箱根のアシノコ・ホテルに外人を診察し

に行かれましたか」

「ええ。行きました。石油会社の支配人を……ラルサンという老人です」

「その時にあの女を連れて行かれましたか」

「行くもんですか。一人で行ったのです」

／「ところがユリ子は、その日の午後には病院にいなかったそうです。昨夜、君の病院の看護婦に電話で問合わせてみたのですが、何でも君が出かけられると間もなく横浜駅から自動電話がかかって、直ぐに身支度をして横浜駅に來いと命ぜられたそうですが……」

「へエ。驚きましたな。あの女は少々電話マニアの気味があるのです。よく電話を応用して虚構を吐きます。そんな電話が実際にかかっているように受け答えるらしいのです」

「とにかくソナ訳でユリ子は、大急ぎでお化粧をして、盛装を凝こらして病院を出て行ったそうです」

「プツ。馬鹿な……盛装の看護婦なんか連れて診察に行けるもんじゃありません」（『少女地獄』 本文引用）

このやりとりは端的に述べれば、白杵と姫草ユリ子の不貞の存在を示している。本作で興味深いのは、姫草ユリ子の身体的が白杵によって語られることだ。具体的に言えば、彼女の月経前に発生する虚言に言及することは虚言が発生する「彼女に月経が来ていることを書簡の読み手に認知させる効果を持つ。だとすれば先

の引用にあるように姫草ユリ子が述べたとされ、白杵によって「嘘」だとされた白杵の不貞行為は、実際は「嘘」ではないのではないか。そして白杵が姫草ユリ子の月経周期を語ることは、月経周期がまるで正しいリズムで来ているかのような演出であり、姫草の持つ「少女」のような無垢な神秘性が今なお肉体に秘められており、男性によって穢されているわけではないということとを述べようとしたのではないか。また姫草ユリ子が白杵との間に起こった出来事を事実として誰かに明かした場合にも、語られた内容を姫草ユリ子の「嘘」とするための布石がここで置かれていたと考えることができるのではないだろうか。

つまり『何でも無い』において物事を、「何でも無い」ことにしたがるのは語り手のみなのである。そして白杵が姫草ユリ子を恨んでいないという発言も、彼女の存在を「何でも無い」ことにして、もはや怒りなどの感情を排して関りを断ち、距離を置くこうとする意志の表れではないだろうか。

ただし、だとすれば姫草ユリ子が語り手である白杵に残す遺書についても、別の目的が浮かんでくる。

相手の紳士はそうした私の顔を、その黒い、つめたい執念深い瞳付で十数秒間、凝視しておりましたが、やがてまた胴衣の内側から一つの白い封筒を探り出して、恭しく私の前に置きました。……御覧下さい……と言う風に薄笑いを含みながら……。（『少女地獄』 本文引用）

本テクストは、曼荼羅が白杵に姫草ユリ子の「遺書」を提示することではじまる。実はここでの姫草ユリ子の本当の目的は、この書簡を作成させることそれ自体にあったのではないだろうか。仮に白杵と自分との間にあった〈不貞〉を誰かに話しても、白杵の手によって「嘘」として処理されてしまうのであれば、真実なのではないかと聞いたものが誤認するような「嘘」を語ることでは、あれは派手な「嘘」なのだという風に、白杵側に弁明する必要がある状況にもっていったのではないだろうか。

白杵によって姫草ユリ子の「嘘」が相対化されるように、姫草ユリ子によって白杵の「嘘」を相対化させるものである。姫草は遺書によって、その内容を相対化するのに必要な書簡を白杵に書かせるという行為を仕向ける。

白杵医師は姫草ユリ子をめぐる一連の悪夢を、白日の下にさらして他人と共有することで処理しようとしたのである。⁹⁾

このような白杵の考えを逆に利用したのではないだろうか。ユリ子は極端な「嘘」によって、発生した物事について脚色を加えて説明する。それを受けて正当性を示したくなるであろう白杵の書簡によって、不貞の事実を告発しようとしたのではないだろうか。

中川綾乃が論文中でまとめた表によれば、曼荼羅のもとに姫草ユリ子が入院したのは昭和八年十一月二十一日であり、白鷹への「書簡」を白杵が書いたのは十二月七日にあたる。つまり姫草ユ

リ子が逃亡してから白杵が「書簡」を書くまで最低でも二週間が空いているのだ。この事実は、白杵が白鷹に対して経緯を説明しようとするまでの期間の長さを示す。そして姫草ユリ子の「遺書」によつてはじめて、白鷹に対する経緯の説明を行うに至ったこともわかるのである。またこれによつて、白鷹と白杵の仲が白杵の語った以上に進展していないがわかる。つまり、姫草ユリ子の遺書という極端な「嘘」が出てくるまでそのことを記す意思がなかったのではないか。

それと同時に、姫草ユリ子自身が、

お二人の先生方のようなお立派な地位や名望のある方々にまでも妾の誠実が信じて頂けないこの世に何の望みが御座いましょう。社会的に地位と名誉のある方の御言葉は、たといウソでもホントになり、何も知らない純な少女の言葉は、たとい事実でもウソとなつて行く世の中に、何の生甲斐がありましょう。(『少女地獄』 本文引用)

と語るように、白杵が嘘をつき姫草を陥れた可能性が述べられる。実際はこの言葉の真偽も怪しいものであるが、中身が極端な「嘘」ということになれば、仮に真実であつたとしても当の姫草ユリ子が死んでいれば、死人に口なしとして、白杵は偽の経緯を語ることができるのだ。

白杵の言葉も、書簡の読み手白鷹および本作の読者によつて、姫草ユリ子と同様に相対化される。

このように男によつて事実が切り取られ、「嘘」として言葉が解釈される。そこに少女の「地獄」が演出されており、また白杵にとっては少女によつてもたらされた地獄とも言え、「何でも無い」ことにしたい社会的立場のある男が、それを持たない少女によつて環境を「地獄」に変容させられる作品でもあるのだ。

そして、この堂々巡りのような地獄は、お互いが自分自身の正しさを証明しようとすることで発生する。『何でも無い』は白杵を語り手として進行し、我々はまずは白杵の言を信用するように読んでいく。しかし、実際には姫草ユリ子側の言説も、同次元で存在していてもおかしくないはずである。これは『何でも無い』が当事者である白杵、姫草の両名のうち、前者のみの言説で成り立っている結果であり、すべてが話者の主観に還元される一人称には、姫草側の言説にも正当性がある可能性を示し、この可能性は白杵の関係者の中でも常に想定されることになる。個人によつて真実か嘘か変化するものが、一人称の語りで物語が進むことの影響で、両者がお互いに自身を真としながら、相対的に相手を嘘にする形にしまつていく。両者ともに真である可能性を盲目的に排してしまつていくことも、「地獄」の演出の一助となつていのである。

三 『殺人リレー』の「地獄」

『殺人リレー』は前述のように、書き下ろしの『何でも無い』『火星の女』とは異なり、はじめ『新青年』に掲載され、『少女地獄』として再構成された際に両者の間をもの作品として位置づけ

られた作品である。

個々別々の三作品に総タイトル『少女地獄』を付しているからには、他の二作品を書き下ろす際、既に発表していた「殺人リレー」となんらかの連関を意識して執筆した可能性がある。つまり、「何でも無い」「火星の女」の二作品へと通ずる契機となったのが「殺人リレー」であり、「殺人リレー」に胚胎していたテーマや方法を発展させたものが後の二作品であるとも考えられるのである¹⁰。

このように『殺人リレー』の位置づけを考えることは、『少女地獄』全体の関係性を示し、かつそこに描かれている「地獄」について考える一助になる。

はじめに大まかな内容を確認しておきたい。『殺人リレー』は「第一の手紙」から「第六の手紙」と記された書簡が時系列に従って配置されたテキストである。友成トミ子から山下智恵子に宛てた書簡には、九州でバスガールとして働く友成トミ子のもとに、月川ツヤ子から「夫の新高に殺されるかもしれない」旨を記した手紙が来ていたこと、月川ツヤ子が亡くなったことが記されていた。続く書簡には、新高がトミ子の勤めるバス会社に来たこと、新高に求婚されたことが記され、復讐することを思いながら彼に惚れてしまったこと、最終的に新高と同乗したバスを列車が迫る踏切へと誘導し、衝突事故を引き起こさせるまでの顛末が描かれる。そして新高の子を身ごもっていたトミ子は、友人の智恵

子に書簡を残して自殺する旨を記している。

物語のはじめは女車掌になりたい旨を記した、友成トミ子の山下智恵子への返信である。

「勇カンでスタイルがい、と思って」という動機から女車掌になった友成トミ子は、新時代を象徴する職業婦人に憧れるモダン・ガールである¹¹。

多くの先行論で指摘されるように、友成トミ子はモダンガールとしての一面を強調されている。そして職業婦人として自由を得る反面、それに退屈を覚えていることが示唆されている。

彼女は、自分の意思で職業を選べる気楽さと、寄る辺ない身の虚しさとの間で生きる目的を失い、ゆらいでいるのである¹²。

トミ子は「平凡」を嫌う。彼女にとり「平凡」とは、希望の無い毎日であり、灰色の世界であった。女車掌殺しという「非凡」を生きる新高に惹かれたのもこうした気持ちからかもしれない¹³。

これらの先行論は、友成トミ子の「日常」を嫌い「非日常」を求める姿勢を言及している。これらは続く書簡でも強調され、友成トミ子は刺激を求め、ツヤ子を殺害した新高を「自殺させる」ことを目標とし、それがどんなに愉快なことであるかを語る。そ

うして大事故を意図的に起こす。しかしながらその目標の達成が彼女に退屈を再度与え、自分の死にたどり着くところまで至る。この自死に関しては次のような言及がある。

トミ子は、「平凡なる愛」よりも自らを日常から解き放つ「非凡なる欲」の方向へまっすぐ突き進んだと考えるのが妥当なのかもしれない。¹⁴

常に新しい目的を求めて彷徨うモダン・ガールが最後の目的としたのは、自身の死だったのだ。¹⁵

このように考えれば、彼女が書簡として「遺書」を遺す目的も見えてくる。しかし、ここで考えなければならないのは、それらがどう加工されているのかである。我々読者側に、作中の書簡をテキストに配列された通りに読み進めるが、この配列に意図を見出すことが可能ではないだろうか。正確に言えば書簡の順序それ自体ではなく、ここでは本来書簡のやり取りとして行われるはずの「返信」が欠けていることに見出せるものがあるのではないか。

『殺人リレー』は六つの書簡の形をとり、それらが一定の時間の流れをもって並べられている。「第一の手紙」から「第六の手紙」と題が付されてその都度の近況を報告する書簡は、友成トミ子が山下智恵子に継続的に手紙を宛てていたことを示す。それは書簡が宛て先である山下智恵子の「返信」は掲出されていない

が、明確なやり取りを匂わせる形である。本作は友成トミコ子の書簡のみが、テキストを構成している。そこには「第一の手紙」で、月川ツヤ子が書き友成トミ子に宛てた書簡以外は、友成トミ子の記したもののしか存在しない。より正確に言えばツヤ子がトミ子に宛てたその書簡は、トミ子が智恵子に送る際に「月川ツヤ子さんの手紙」と題し、その上下に線を引いて囲っている。「月川ツヤ子さん」と記されているので、当然ツヤ子が送る際につけたものではなく引用されたものだ。そのように考えると『殺人リレー』のツヤ子の「書簡」はトミ子の語りの一部に還元されており、そこにはどこまでも友成トミ子のものしか記載されていないといえる。

もし仮に、これらすべての書簡が、友成トミ子が一方的に送り付け「返信」のないものだとしても「第一の手紙」冒頭部にある「お手紙ありがとうよ」の言葉から明確なように、そこには少なくとも「第一の手紙」以前の山下智恵子の書簡があったはずである。『殺人リレー』においてはそれが意図的に省かれているのだ。つまり山下智恵子の「返信」は意図的に語られていないのである。『殺人リレー』の語り手は智恵子本人または智恵子側に与する人間であるために、送付した書簡が手元にないためにテキストに智恵子の書簡を置くことができないとも考えられるが、そうであるならば、その旨を語り手が地の文で説明したとしても不自然ではない。つまりここには、そのような形にすることの目的があるといえるのだ。

ここで確認しておくべきは作中で「遺書」がもたらす効果であ

る。テキスト内での友成トミ子の自殺は、おおむね「日常」を嫌う出来事として解釈されてきた。

生死の判断を保留された彼女は、物語の中で〈仮死〉したまま、存在のゆらぎの渦中に漂うのである。／「遺書」によって物語を閉じるという方法、友成トミ子の生死を決定することを不可能なものにしている。／この宙吊りの形態は、書き手の消息を曖昧なものにするのである。¹⁶

『殺人リレー』においての「遺書」は、友成トミ子の生死の曖昧さを強調する。「遺書」という返信不可能な書簡でもあるために彼女の消息すらも曖昧にする。

確かに「遺書」単体で見ればそのような効果があるだろう。しかしここで考えるべきは、他の「書簡」にも「返信」が排除されていることにある。もし伊藤里和が述べるように、「殺人リレー」のテキストが死を曖昧にして〈仮死〉を演出するのであれば、同時に山下智恵子の「返信」を配置して、「遺書」だけの「返信」を排除すれば、よりその返信不可能性が強調されるはずである。しかしそうなのではない。つまり「返信」が語られない意図には、なにか別の目的が存在していると考えるべきである。

この「遺書」によって彼女の妊娠が明らかになるが、死を決意した彼女は母になることも拒絶したのだといえる。¹⁷

トミ子が新高の愛を拒否し、「母」になることを拒絶した物語として読むことは可能である。¹⁸

つまり友成トミ子は少女でも母でもないその曖昧な境界で揺れ続けているのである。新高の妻という立場も（最初は新高を追い詰めようとする冒険心があったが徐々に失われていく）新高の殺人によって無に帰され、愛のための新高との心中もまた「ツヤ子の恨み」という形で新高に認識され、無に帰される。彼女の行動の意味は誰にも承認されず、どこまでも曖昧なのである。彼女の行動をそれ自体として承認するのは、テキスト内の書簡の中だけなのだ。しかし「書簡」という形はそれを読むものに友成トミ子の行動の実際を示し、曖昧性を排除する。ここに『殺人リレー』における言説の〈ズレ〉が存在する。

おそらく彼女は「書簡」を残すことで自身の行動の曖昧性を排し、自己の行動の意味を認めさせたようとしたのではない。しかしこれまでの流れから、結局彼女はその目的を遂行できていない。そのために「夫殺しの吾児殺し」となって曖昧性のない殺人者という自己を、それがなくなることのない「書簡」という形に残して「死」をえらんだのではないか。だからこそ、それら「書簡」は同じモダンガールを目指す山下智恵子のもとに送られ、認識してもらおうとしたのだろう。そのように考えた際、「返信」が意図的に語られていないのは、「返信」を配置することによって友成トミ子の書簡が相対化されることを避ける目的があったのではないだろうか。

智恵子に送られた「書簡」はすべて順番通りに名前が付けられている。これらはトミ子を送る際に付けられたものだろうか。いやそもそも最初の「書簡」が返信である以上、その可能性は薄く、何者かによって後付けされたと考えるのが妥当である。それが智恵子であるかどうかは不明だがこのような題を付けられ、別々の「書簡」が物語性をもって並び、語られたのだと解釈することができる。

自身に関しての曖昧さを排すための友成トミ子の「書簡」は、物語性をもって認識され、死を介してそれを決定づけられようとする。これが『殺人リレー』において「返信」が欠けている意味なのではないか。「書簡」を配列した語り手は、友成トミ子の意志に沿うようにした。しかしながらそこでは「遺書」の性質と、その「死」が描写されないことによって、意味が反転する。死が描写されない構成によって彼女はどこまでも曖昧なままの（仮死）の状態にあることを決定づけられてしまったのである。このように自身の思いとそれに続く行動が、意図していたものと正反対の性質を持つものと認識され、世間に決定づけられる状況にこそ『殺人リレー』の「地獄」があるのではないだろうか。

四 『火星の女』の「地獄」

『火星の女』は『少女地獄』の三番目に配置された作品である。冒頭には、黒焦屍体が発見されそれに関する人間の諸相を語る新聞記事が並んでいる。その中身は、ある県立高女で火災が発生し、校内の物置から一人の女性の遺体が発見され、身元が判明し

ていないこと、同校の校長が引責謹慎を行っていることが明かされる。別の記事では、校長が失踪したこと、二通の書簡が消えことが記されていた。さらに別の記事には、同校長が発狂、女教諭が縊死、書紀の僂僂男である川村が大金を持ち失踪したこと、続く記事では、校長の山高帽子と身元不明の花簪が天主教会で発見されたことが記される。最後の記事は県視学である殿宮愛四郎の娘で天主教会に出入りしていた殿宮アイ子が、取り調べの最中に母とともに姿を消したこと。それについて愛四郎が語ったこと、ならびに失踪時にアイ子が残した遺書があることが綴られている。さらに遺書の文言も掲載され、黒焦の焼死体は甘川歌枝という人物であること、天主教会に帽子と花簪をかけたのは自分であること、自殺はしないが決して探さない欲しいことが記されていた。

そこから先には、校長が失踪した際に読んでいたと思われる書簡と同じものが記されている。書簡では、記事となった事件の真相と動機が明らかになる。書き手である甘川歌枝の学生生活からはじまり、森栖校長と川村先生の悪事の密談、校長との間にあった行為や虎間教諭から校長を咎める際に聞いた秘密が綴られている。復讐を思う歌枝は校長の悪辣さを暴露しようと計画し、行動したこと記しながら、死ぬことをほのめかしている。

『火星の女』が前二つの作品とは異なる特徴として、この新聞記事の存在が挙げられる。伊藤里和はこのことに触れている。

冒頭の新聞記事は黒焦屍体となって発見された一人の少女を

めぐる事件を追ったものであり、この事件に関する人間模様やその後の捜査の展開など、客観的事項を報じるものである。／新聞記事に「遺書」が続いている経緯については、本文中明らかにされていない。／新聞記事のおわりと「遺書」の間には二十二字分のダッシュによる区切りの線が引かれており、新聞記事と「遺書」が物語の上で断絶していることが示されている。つまり、「遺書」は物語の中で連続せず、宙吊りの状態にあるのである。

同様の指摘を簡潔ながら中川綾乃も行っている。

物語はアイ子の手紙を最後に一旦区切れ、次の場面からは焼身自殺をした甘川歌枝が森栖に宛てた遺書の内容が綴られる。

物語は事件を新聞が報道したことからはじまり、最終的には甘川歌枝の書簡によって事件の真相が語られる。この新聞記事の特性は、書簡とは違いそれが世間に流布すること、またその内容がある程度客観的と見なされていることにある。つまり書簡が特定の個人とのやり取りであるとすれば、新聞記事は公的な性質を帯びていると言える。本作における両者は対関係にあり、新聞記事で書かれている部分の真相は書簡で示され、書簡の出来事の結末は新聞記事で記されている。これが『火星の女』の特徴である。

はじめに『火星の女』の大部分を構成している書簡部分について

て整理する。これらの書簡は甘川歌枝が書き手となり、彼女の一人称で進んでいく。それは書簡である以上、そこには書き手の意図がある。『火星の女』を「読すれば、そこには当然、森栖校長の悪事を暴く目的、そして復讐心のあることが読みとれるだろう。重要なのは、この悪事は作中で森栖のみが行っているわけではないことだ。もし悪事を暴露するのが第一の目的であるならば、書簡が森栖のみことには送られているのは違和感がある。書簡を森栖だけに送るのは何かしら別の理由があると考えるのが妥当だろう。よって、ここで読みとるべきは復讐心についてである。

甘川歌枝は作中で最初、自分のことを、

私はまだ物心付かないうちから、人に笑われるために生まれて来た、醜い、ノッポの私自身を知りつくさなければならなかったのだ。

私が尋常六年頃から新体詩や小説を読み耽るようになったのは、そんな悲しさや淋しさが積り積つたせいではなかったかと思っています。つまり私は皆様のお蔭で、人並はずれて早くから淋しい、一人ボッチの文学少女になってしまったのです。 (『少女地獄』本分引用)

と述べ、家庭という環境においても辱められていたと語る。それは自らの女性性に関わり、自身の身体があまり女性的ではないこと、それを揶揄されることを悩みとしていた。それゆえに彼女

は、家庭の外に自分だけの居場所を作り、そこに慰めを見出すようになる。つまり彼女が身を置く廃屋は彼女にとっての一種の安息地にあたるといえる。その後、作中でここを安息地として利用する人間が他にも出てくる。それが森栖校長である。彼と書記の川村は廃屋の中で、悪事を組み立てる。

虚無の世界こそ真実とする主人公にとって現実とは仮象であり、物置小舎を舞台にした校長たちの悪徳も「芝居」の一つにすぎないのである。²¹

この廃屋は彼らにとって、日常との境界になっており、甘川歌枝もまたその事実を認識する。彼女がそこに家庭からの境界として救いを求めるのと同様に、森栖らにとってもその場は道徳から逃れられる救いの場になっているのだ。甘川歌枝は、以降その場で彼らの悪事の計画を聞くことになる。

歌枝にとって周囲が知らない森栖の本性を知ること、貶され蔑まれてきた自身の人生においての楽しみであり、目標も無くただ空虚な生活を送る彼女にとっての「生き甲斐」となったのである。²²

中川綾乃によれば、これは甘川歌枝自身の一種の生甲斐となっていると述べられている。ここでの彼女の状態は、同じように廃屋を利用し、それに救われている人間がいることを知って、それ

が救いとなるとともに、悪事について盗み聞きしたことで一種の享楽状態にあるといえる。

突如として「芝居」に巻き込まれることになってしまう。²³

しかし伊藤里和がこう述べるように、甘川歌枝は廃屋の中で、森栖校長と一悶着の末に襲われ、傍観者ではなく、当事者としてその場に立たされてしまう。甘川歌枝はここで森栖に肉体的な性を与えることで、逆接的に女性性を確立することになる。

私には、

「この憐れな、淋しい老人を救ってくれ」

と仰言ったお言葉が、校長先生の実のお心から出たお言葉のように思えて仕様がなかったのだ。たとい、それが間違つて私に仰言ったお言葉であつたにしても……。

私はもう、私の知らない間に虚無ではなくなっていたのです。校長先生の御蔭で、女としての純情に眼ざめ始めていたのです。『少女地獄』本分引用)

結果として、甘川歌枝は森栖に対してこう思うようになる。その理由としては、森栖が自身と同様に救いを求める存在であり、その救いが女体によつてもたらされること、そして自分がその要件を満たしていることに気づいたことが挙げられるだろう。そしてこれまでの虚無なる自我とは違う、女性として認められる新た

な自分が生まれる。

歌枝は、強姦された事実自体に怒りを抱いていない。むしろ、そういった行為に及ばざるを得なかった森栖を強姦という方法でも救うのが自分のすべきことであるかの如く語っている。なぜ、自身の身体の清浄を奪った男を救おうとするのか。歌枝が「愛情」を感じていたからではないか。

これを「愛情」という言葉で括るのは無理があるが、事態の本質にそのような側面があったことは否めない。問題なのは、書簡で語られたこの出来事は、甘川歌枝の主観によって完結していることである。ここには実際は森栖がどのように感じたのかは記されていない。森栖が「救ってくれ」とささやいたのは、甘川歌枝に対してではなく、ここまでの物事はすべて彼女が自分の内面で理解したことに過ぎない。そのために、やがて両者には齟齬が生じてくる。

私はあの時に、よくあれだけ落ち着いておられたと思います。実際、三、四日前の廃屋の中の出来事よりも、この時に父から聞きました大阪行きのお話の方が、ガア——ンと私をタタキ潰したのです。

私はこの時ほど、私の気持を裏切られた事はありませんでした。校長先生が私を大阪へ遣ろうとしておられる……と言う事が、私を絶望的に悲しませたのです。（『少女地獄』本文引用）

ここで彼女は、森栖の真意を知ることになる。それは自分の認識とは異なるものであった。謝恩会の日に森栖から放たれた言動から、縁談で別の人間を自分にあてがうことで彼女との関係を解消しようとする姿勢を見たのだ。これによって甘川歌枝は復讐を決心するのである。

ここで考えたいのが、彼女はなぜその復讐の過程を語るのか、ということだ。もちろん復讐なのだから、それを行う理由を語ろうとすること自体は不思議ではない。しかし彼女があえて物語としての時系列を持たせて、自分という人間の性質までを含めてそれを語る理由はないはずだ。興味深いことに、『火星の女』の中で甘川歌枝の「愛情」のようなものが、森栖以外の人間にも向いている場面がある。

殿堂アイ子さんは在学中、私の大切な大切な愛人だったので。お友達のうちで詩というもののホントウにおわかりになる方はアイ子さんお一人だったのです。誰も知りませんけれども、時々コッソリとお眼にかかった事が何度あるかわかりませんので、あの物置のアバラ家の二階で、虚無のお話をし合ったのも一度や二度ではなかったのです。／それから二人でモダン写真館へ行って記念写真を撮りますと、あそこの写真館のサロンで二人で抱き合って長い長い接吻を致しましたが、二人とも涙に濡れて、お互いの顔が見えないようになってしまいました。（『少女地獄』本文引用）

ここでの表現を見ていくと、甘川歌枝と殿宮アイ子は一般的な学友というよりは、それから発展し、ある種の愛情ともいえるような関係が築かれているように思う。この女性同士の愛情は、本作では男性と女性の愛情とは一線を画している。つまり男女の愛情を相対化するように、言わば正しい愛情の形のように置かれている。そして重要なのは、この愛情表現は甘川歌枝の書簡の中で、森栖に復讐しようとするタイミングで表出することだ。それまで書簡の中で殿宮アイ子の存在は、名前も出てこなければ、二人の関係も出てこなかった。しかし森栖に復讐する過程になって、それは突然現れる。大切な愛人であること、甘川歌枝の秘密の廃屋に一緒にいたという語りが後付けのように挿入される。まるで森栖との関係は間違いで、こちらが正しい関係であることを伝えるような印象さえ受ける、復讐のタイミングになり唐突に現れることで、それまでの森栖との関係には迷いがあり、正しい関係には迷いがないことを告げているのだ。言い換えれば、甘川歌江はそう語る行為によって自己の安心を得ようとしたのではないだろうか。

他に考えられることとして、復讐を行う過程を説明することで、森栖に自分の思いを語り、あの日の行為は愛情によるものではなかったことを伝えようとしたのではないか。そしてそれを示すために、殿宮アイ子の存在が書簡の後半に、急に置かれる形になったのではないだろうか。

家庭に於ける婦人の美しい本能……清らかな愛情は、この男

性と戦う唯一、無敵の武器であります。どんなに気の荒い、血も涙もない男性でも、この婦人の底知れぬ忍従と、滌てしもない愛情によって護られた家庭の中に在っては、底の底から安心して平和を楽しむ心になるのであります。そうして知らず知らずのうちに大きな感化を、その心の奥底に植付けられて行くのであります。(『少女地獄』本文引用)

その際の彼女の出で立ちは「古着屋から買って来ました黒い背広に、黒の鳥打帽、黒眼鏡と云ふ黒づくめの服装」、すなわち男装であり、さらに「男のやうな歩き方」をするという徹底振りである。彼女は長年のコンプレックスであつた長身を逆手に取り、男役を演じるための道具にしているのである。

そして女性によって救われたいという思いを抱く森栖に対する、皮肉のように男装を行い、甘川歌枝自身は殿宮アイ子との関係を、性別に囚われず享受する。この森栖との一件で生まれた空虚を埋める、それを否定するために、甘川歌枝は最期に彼女にとつてもつとも空虚な記号である「火星の女」を名乗る。よつて『火星の女』の甘川歌枝の書簡が復讐の過程を語るのは、過去の出来事を間違いとして正しい形を示すためであり、過去の行いによって発生した書簡の送付先の相手を持つて印象を是正し、恥ずべき過去を清算し排斥しようとしたのではないか。それが書簡に込められた真意として読むことができるのだ。

ここまでは、甘川歌枝の書簡に注目して話を進めてきた。しか

し『火星の女』というテキストは新聞記事を用いて、その書簡が相対化されているテキストであった。新聞記事と書簡という『少女地獄』の他二編とは違うテキストの構造は、なにかしらの意味があるのではないか。以下では、その特性に着目し考えていこうと思う。

ここで最初に確認しておくべき点は、本作に登場する複数の書簡の問題である。

そうして校長先生が、私の黒焦屍体を御覧になっても……そうしてこの手紙をお読みになっても反省なさらずに、知らん顔をなすったり、平気で誤魔化して行こうとしたりなさる御模様があつたら、念のために書いて置きましたほかの一通を警察署へ出して頂きます。そうして、それでもこの事件の真相が世間へ発表されず、校長先生と棒組んで、浅ましい恥知らずな事をしておられる方々が、校長先生と御一緒にこの事件を暗から暗に葬ろうとしてお出でになる御模様がわかりましたならば、そんな関係と新聞記事を封じ込んだ、これと同じモウ一通のコピーを抜からないようにある方面へ廻わして、ズット遅れてから発表して下さるようお願いして在るのです。〔『少女地獄』本文引用〕

これらの書簡は、殿堂アイ子の手に渡り三つの箇所に送られる。一つは森栖校長のもとへ、二つ目は警察のもとへ、三つ目は「ある方面へ廻さ」される。ここで考えるべきは、テキストに配

されている書簡はこの三つのうち、どれであるのかということだ。真相として置かれているこの書簡は、封書である以上、誰かが開封して読んだと捉えるべきだ。

これを本文にある新聞記事をもとに考えると、一つ目の校長宛は、校長が虎間トラ子に宛てた遺書とともに誰かに持ち去られ紛失している。また本文に、「この重大なる失態に就いて、警察当局は何故か口を緘して一言も洩らさず」とあることから、おそらく事件の詳細そのものが警察によって隠されている。つまりところ、事件に直接関係ある二つ目の書簡は警察が秘匿し、世間には公開していないのだろう。そこで考えると作中に出てくる書簡は、おそらく三つ目の「ある方面に廻さ」れたものであると推察できる。おそらく先の引用にある「世間に報せない」状況に陥ったため、三つ目として送られ、それを読まれたものであると考えられる。

一見すると『火星の女』は、新聞記事となつた客観的な事件というものが存在し、その真相が書簡という個人に宛てるべきものに記されていることで客観視されるべき場所には表出していないといった体で読める。書簡という主観のままであることは、それが甘川歌枝側から見た事実であることを読み手へ如実に示すことになる。言うなれば彼女の動きや心情に正当性を持たせることができ、新聞記事によって相対化されていない部分として、甘川歌枝が感じたことを表す装置になっているといえる。だが実際には、この書簡は「ある方面に廻さ」された結果、誰かに読まれたと捉えるべきなのだ。

ここで重要なのは、それを送られた相手は「ある方面」という客観視できる場所に出た書簡を、個人の主観で完結する書簡という形のまま置いていることにあるだろう。具体的に言えば「ある方面」のものは、例えば情報を新聞記事のような形にしていないうい。あくまでも「ある方面」の中で、複数あるいは個人の中で読まれているような形になっていると考えられる。

その結果、作中で甘川歌枝の書簡は、唯一の主観として語られた完全な遺書として存在している。例えば作品内に同様に遺書として出てくる殿宮アイ子の書簡は、その中身を新聞社側に解釈され、新聞記事に取り込まれる形となっている。一見すると殿宮アイ子を書いた遺書は本文そのまま載っているように見えるが、それを記事にする際に題がつけられ、まるで黒焦事件の犯人かのように演出されている。つまりは完全な遺書として成立していないのだ。作中で完全な遺書は甘川歌枝の遺書だけなのだ。

言い換えれば、このように完全な遺書の形として手が加えられず存在することで、この書簡は、三つ目の書簡が送られた「ある方面」と同じ目線に立って、真相を享受することを、我々読者側に可能にするのである。それによって、先に述べた甘川歌枝側から見た事実を直接読み手へ受け渡すことにつながっている。先に新聞記事が羅列されることで、甘川歌枝の書簡の中身に説得性が生まれ、読者側が納得できる形になっているのだ。

ここまでを踏まえた上でさらに考えたいのは、『火星の女』というテキストは、最後に甘川歌枝の遺書で終わっているが、物語世界においてはおそらくその限りではないだろうということだ。

先に述べたように、もしこの書簡を読んでいるのが「ある方面」の人物であれば、これは発表の過程であるはずだ。発表前なのか、発表後なのかは不明であるが、おそらく発表前であるのではないか。発表後であれば、わざわざ書簡の形式そのままである必要はなく、そもそも発表という役割を果たした以上、その中身を再度語り直す必要はないからである。よって、この遺書の全文は、たとえば新聞記事のような形で発表される前の作業の一過程として要約されたのではないだろうか。

つまり物語世界の中では、書簡のままで完結せずこれが発表される、その後があるはずなのだ。そして重要なのは、我々読者側は、それがどのような形で発表されるのか、その部分まで読むことができない点にある。つまり新聞記事のように客観視が得られる場に、どのような形で出ることまで読むことができないのだ。もしかすると、殿宮アイ子の遺書と同様に、真意が別の形に組み変わる可能性すらあるかもしれない。どのような形になるのか、それは曖昧で徹底して不安定なのだ。

補足しておく、この物語は記事が並べられているという構成上、事件に関して誰かが意識的に羅列した結果であると考えられる。書簡内で「そんな関係と新聞記事を封じ込んだ、これと同じモウ一通のコピーを抜からないようにある方面へ」とあることから、おそらく書簡に同封された記事を並べた「ある方面」の人間が、続けて書簡を置き、中身を構成しながら検分している段階だと考えられる。この段階で書簡を読むという行為を、「ある方面」の人間と我々『火星の女』の読者が共有しているのだ。このよう

に考えていくと、我々読者側は事件の真相を知ることができて、物語世界の人間はその限りではないといえる。書簡の本身が新聞記事のような客観性をもった形で出ていない以上、書簡を読んだ「ある方面」の誰かによって発表された際にそのメッセージは歪む可能性があり、実際どうなるのかは確定されていない。どのように客観化された事実として報道されるのか不明のままなのだ。

そしておそらく、この書簡を踏まえて「ある方面」が出す、記事のような客観化された何かは、「事件」として報道されるだろう。書簡の中で「火星の女」としての自我を確立する甘川歌枝ではなく、「事件」として捉えられる。つまり書簡に内包されている真意からいずれにせよ逸脱していくのだ。事実を客観的に捉える報道する新聞記事でさえ、情報の取捨という過程で主観が入る。甘川歌枝がどのように思い、どのように感じたとしても、書簡の本身を知ることができる人間はその事実を都合の良いように切り抜き、それによってゆがんだ事実を知るものが生まれる可能性がある。さらに、読者の次元のようにその可能性すらも知ることができる。さらに、読者の次元のようにその可能性すらも知ることができる。物語世界の人間は甘川歌枝の書簡の本身そのものを、我々読者側の人間はその書簡が物語世界でどのように報道されているのか、それぞれその事実を知ることができる。はできないのだ。

少々視点を変えて考えてみると、本作の語り手は発表の意図を持ってしていると仮定したうえで、ならばなぜ記事の形ではなく、「ある方面」の人間が読んでいる状態のまま、手のくわえていな

い書簡を配置するのだろうか。先に、検分している段階であると述べたが、なぜ検分段階の書簡の状態で語ることがあったのだろうか。当然ながら記事が配列されている以上は、この検分の段階であえて止めるという、語る行為についても意識的であるはずだし、意識的であるならばそこには理由が存在するはずだ。その可能性として、もしかすると語り手は書簡の真意、すなわち甘川歌枝の真意自体には、自分の手が入っていないことを証明しようとしたのではないだろうか。記事ではない加工されたものではないと、自らが語ることで逆に真意をそのままに伝えようとしたのかもしれない。

ここで前さらに確認しておきたいのが、実際に「ある方面」の人間の手が入ったかどうかは我々の世界の読者にも物語世界の読者にもわからない点にある。先に述べたように、我々の世界の読者は物語世界で実際に書簡がどう流布したのか、物語世界の読者はもともとの書簡の本身について、知らないために「ある方面」の人間にどのような意図があろうと伝わることはないということだ。本稿の筆者が属するのはあくまで読者と同じ我々の世界であるため、すなわちこの考えもまた語り手の実際の意図であったかどうかは不明であるし、だとすれば「ある方面」の人間の意図が伝わることは永遠にないといえる。つまり、「ある方面」の人間による、甘川歌枝の書簡を本文そのままに配置することは、語り手としてはどのような意図があろうと（たとえ、自分の手が入っていないことを証明するためであらうと）伝わらない。むしろ、手が入っていないことによって、記事にしようとする意志やその

他の可能性も描かれないうために、我々の世界にとっても物語世界にとっても謎が残る形になってしまったのだ。「ある方面」の人間は、書簡の真意を伝えるために自身の直接的な語りは挟まない。それが結果として、真意がどう伝わったのか明らかにされず宙吊りにされるのである。

この「ある方面」の人間は、本来ならば誰にも気がつかれることとは無い語り手のはずだった。しかしながらそれが三つ目の書簡の存在によって語り手としてその存在が浮かび上がってくるのだ。書簡の主観的でもっとも人間性が見えてくるはずの話が、語り手の存在が意識されることで崩れてしまう。そして他の記事の存在と内容が、結果として書簡の記事に組み込む際にゆがめてしまふ可能性も提示する。しかしこの可能性について、結局どうなったのかという疑問は永遠に解決されないのだ。もっとも真意を伝える書簡の本文そのままという行為は、その瞬間に反転し、この手紙の真意が実際にどう伝わるのかを不明瞭にする。語り手の意図が裏目に出て、反転する形になっているのだ。甘川歌枝自身は、死亡（実際に死亡しているかどうか、という意味ではなく新聞として世間で死亡扱いになった）しているために再度自分に起こった事実を誰かに話すこともできない。これらの複数の要素が積み重なったモノが『火星の女』が持つ、少女にとっての「地獄」ではないだろうか。

甘川歌江は書簡という形で自分の置かれている状況を示し、自分という人間を確立しようとした。書簡に込められていた主観は、彼女の死をもって「事件」となることで公表され客観とな

る。しかしその客観にする過程、記事にする際にも第三者の主観が入ってしまい、その形はゆがめられてしまう。よって彼女の書簡を配列した「ある方面」の語り手は、なるべく真意に近づけるように自身の語りを省いた。しかし結果として、それは書簡が真意そのものを伝えたのかどうかに疑念が余地を残し、配列された過去の記事によって方向性を決められ、語り手の意図しない形に語りの内容が歪曲されたと想像される。たとえ客観性を保証するはずの新聞記事であろうと、語るという行為においては、常に何かしらのバイアスがかかることが示され、その語る行為の本質がもたらす少女の姿が本作には描かれているといえる。

五 『少女地獄』の「地獄」

以上のように『少女地獄』では三つの短編において「地獄」が演出されている。それぞれで少女が自己を確立しようとする語り手が置かれながら、その目的は語り手によって果たされずに終わる。また自分自身に発生した出来事やそれによって考え得たものが、他者の影響によって正しく伝わらずに終わる。白杵という語り手によって「嘘」にされてしまう姫草ユリ子の語り、実際の「死」が語り手によって語られないために自己を決定するという目的が果たされないままの友成トミ子の語り、「火星の女」になった事実を周知させるために新聞に送付したはずが、語り手によってただの事件として扱われる可能性、物語世界と読者のそれぞれに答えるのでない謎が生み出されてしまった甘川歌江の語りである。

共通するのは、少女の語りの中身が他人に解釈され伝えられる過程で本来の目的が歪んでいき、伝えたいという目的は理解されるが、他者はそれに沿うようにしないということだ。言うなれば人間の自我の確立にかかる根幹が他者によって歪められるという事態であり、それが「地獄」である。そして本作では「少女」という記号を持つものの行動にまで「地獄」が及び、その「少女」というか弱く無垢な存在によって、より強い「地獄」が演出されるのである。

注

- (1) 伊藤里和「『少女地獄』——少女の遺書と〈仮死〉——」（『国文白』二〇〇六年）においては、「『少女地獄』における三人の主人公の〈仮死〉もまた、そうした思考によって裏打ちされた独自の世界観のあらわれといえる。『少女地獄』によって久作の思考が追及するものとは、〈仮死〉すなわち生と死の境のように、両義的で永続的な生命にほかならないといえよう。」と述べられている。

- (2) 中川綾乃「夢野久作『少女地獄』の世界——漂流する「嘘」「愛欲」「憎悪」——」（『筑紫語文』二〇一八年一月）においては、「久作は「真実と嘘の狭間」のような三つの物語を描きながら、その中で「本当の人間の姿」を追求している。人間から決して切り離すことの出来ない三つの本質は、嘘か真か曖昧である『少女地獄』という作品だからこそ、輪郭を持つのではないか。真実なのか嘘なのか曖昧で、入り組んだ世界

の中でも、人間が人間としての本質の部分だけは必ず存在し、決して消えることはない。久作が描こうとしたのは、そういういった人間の背負う「業」という部分にあったように思う。」と述べられている。

- (3) 申河慶「『転向』と『モダンガール』の終息——夢野久作『少女地獄』論——」（『日本語と日本文学』二〇〇七年二月）においては、一論考として「このような作品テクストの論理性はまた共産党崩壊の顛末に照応する。」と述べられている。

- (4) 前掲、注3に同じ
(5) 前掲、注1に同じ
(6) 前掲、注1に同じ
(7) 前掲、注1に同じ
(8) 前掲、注3に同じ
(9) 前掲、注1に同じ
(10) 前掲、注1に同じ
(11) 前掲、注1に同じ
(12) 前掲、注1に同じ
(13) 前掲、注2に同じ
(14) 前掲、注2に同じ
(15) 前掲、注1に同じ
(16) 前掲、注1に同じ
(17) 前掲、注1に同じ
(18) 前掲、注2に同じ
(19) 前掲、注1に同じ

(20)

前掲、注2に同じ 「甘川歌枝が森栖に宛てた遺書の内容」と述べられているが、作中森栖宛ての遺書は作中で紛失しているため、筆者が考えるに、同じ内容の別の遺書で捉えるのが妥当であろう。

(21)

前掲、注1に同じ

(22)

前掲、注2に同じ

(23)

前掲、注1に同じ

(24)

前掲、注2に同じ

(25)

前掲、注1に同じ

(いわさわ・かずき 本学大学院修士課程)